

LEE  
李

HYE  
恵

KYOUNG  
慶

学位の種類 博士(国際文化)

学位記番号 国博第44号

学位授与年月日 平成16年9月22日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科(博士課程後期3年の課程)  
国際文化交流論専攻

学位論文題目 法と規範を攪乱する言語と現代文学  
— アイデンティティ・ポリティックス批判をめぐる比較文学的考察 —

論文審査委員 (主査)  
助教授 梅木達郎 教授 米山親能  
教授 藤原五雄  
助教授 佐野正人

## 論文内容の要旨

### [研究の目的]

本論文は、今日のさまざまな抑圧構造、とくにアイデンティティ・ポリティックスの暴力性を問題にすると、それを攪乱する境界のポリティックスの可能性が文学テキストのなかでどのように具現されているのか、そしてそこで行われている批判的な言語行為がいかなる意味をもっているのかということを考えようとしたものである。

近代人のセルフ・アイデンティティを支えている諸領域は、自分が属している共同体の文化装置と不可分である。そもそも文化は、アイデンティティ・ポリティックスを規定するものとして、あらゆる境界を定める強力な概念だからである。国民国家がこうした強力な文化装置をとおして政治的・精神的境界線を確定し、安定化させようとするにつねに努めているのは周知のとおりである。考えてみれば、自分が誰であり、また自分が属している共同体が何であるかという自己規定を可能にするプロセスは、すべての文化装置によって実践される活動のひとつである。それゆえ、個人の自己同一化は典型的に共有されたアイデンティティに沿って構成されるものなのであり、その際、言語は

ひじょうに重要な役割を果たす。しかし問題なのは、多様性に関われているべきであるアイデンティティをもっぱら単一的で、本質的な「あるべき姿」として（再）生産し、構造化していることにある。

したがって本論文では、規範生産的なシステムを作り上げ、そこに安定性を与えることによって持続をはかろうとするアイデンティティ・ポリティックスに加担せず、それを攪乱してゆく戦略を、とくに「境界」の概念に求める。すべてのアイデンティティの構築は境界の設定によって可能になるものであり、そしてアイデンティティ形成の本質的な概念を脱構築することを通してそのシステムのもつ同一的幻想を破ることができると思われるからである。その可能性を明確にするために、本論文では三島由紀夫、ジャン・ジュネ、金鶴泳というかなり異質な三人の文学者を取り扱う。それは何よりもかれらが「境界」にとどまろうとする姿勢からうかがえるように、アイデンティティ・ポリティックスにつねに疑問を投げかけていたからである。とはいうものの、かれらのその問題に対するアプローチはまったく同じではない。だが、その方法論的相異がアイデンティティ・ポリティックスをさまざまな側面から眺め、より綿密に検討することを可能にしてもいる。いずれにせよ、かれらのテキストにおける境界のポリティックスの戦略的有用性は、同一化のプロセスに差異を挿入するだけでなく、同一性対差異性という二項対立構造を回避しながら、さまざまな集団を横断し、さらにあらゆる<他者>へと開かれてゆき、政治的な問題の提起をも可能にすることにある。

#### [テキスト分析における視座]

本論文でのテキスト分析の視座は大きく二つに分けることができる。ひとつはテキストの政治性を浮き彫りにするため、テキストに書き込まれている断片的な「政治的無意識」を呼び起こしながらそれを戦略的に読んでいくことであり、もうひとつは脱構築と呼ばれている営みから分析方法の多くを学ぶことである。

#### 1. テキストの政治性とその戦略的な読み

とくに今日において、文学のテキストが政治的信念や社会の諸イデオロギー的価値といったコンテキストと分かちがたく結びつき、さまざまなベクトルの力を交差させる権力の磁場となっているのは言うまでもない。そのため、本論文では文学テキストをたんに自己充足した実体としてみるのではなく、エクリチュールの実践として、つまりディスクールの世界における特殊な編制と理解し、戦略的に読んでいく。何よりもそれは、現代文学における言語実践が単一的なアイデンティティを追求・主張する装置ではなく、むしろ複合性・多様性を肯定する装置として作用しているためである。

ここでいう戦略的な読みとは、テキストに書き込まれているコンテキストの痕跡をテキストの表

面に呼び起こすと同時に、現在のコンテキストと交差させるという二重の作業を指し示す。こうしたことを、フレドリック・ジェイムソンなら「政治的な無意識」と呼ぶだろう。というのも、「途切れることなくつついている物語のさまざまな痕跡を追跡すること」「この原基的歴史の、抑圧され埋葬された現実テキストの表面に呼びもどしてやること」が「政治的な無意識」だからである。結局、テキストを戦略的に読むという行為は、文学とその解釈をより大きな文化的コンテキストにおき、その読みのプロセスには政治的問題が大きく関与していることをつねに意識しながら、テキストを読み込んでいくよりラディカルな方法といえる。

## 2. 脱構築的思考とその営み

本論文は特定の意味で脱構築的なものである。それは脱構築がアイデンティティ・ポリティックスを批判し、他者へと開かれている思考であることと不可分である。しかしそれだけではない。またその思考が本論で分析し、検証しようとする問題の前提、つまりわれわれを取り巻く支配的な言説においてそれを規定している二項対立の諸カテゴリーが、実は対称的なものではなく、暗黙のうちにもっと不安定でダイナミックな関係のもとに存続していることを明らかにするうえでも不可避なものだからである。いうまでもなく、二項対立における拮抗の持続自体がアイデンティティ・ポリティックスを支えている基盤であり、かつ強力な手段である。そうするとわれわれは、何よりも二項対立それ自体の不安定さや矛盾を脱構築的に記述することによってその拮抗構造を解体していくことができる。

### [研究内容の概要]

本論文は重層的構造を取っている。まず「三島由紀夫と言語実践の可能性」と名付けられた第一部はもっぱら三島文学を取り扱っており、いわゆる三島文学論といってよい。そして「境界のポリティックス」と題された第二部は、「三島由紀夫からジャン・ジュネへ」と「差異化の政治学：マイナー文学と近代文化批評——金鶴泳を例に」とに分かれている。第一部と第二部はアイデンティティ・ポリティックス批判という大きな枠のなかでは連続し、重なりあっているが、第二部は三島が取り扱わなかった問題をふたりの作家に求めたものである。そうした意味で第一部が三島文学論であるとすれば、第二部は三島文学を超えて文学と規範の問題を検討したものである。以下では、本論の道程を略述しておく。

### 第一部 三島由紀夫と言語実践の可能性

第一部では、三島文学を形づくる基本的なテキストの特徴を明確にした後、三島文学の最大のモチーフである性的なものや政治的なものとがどのように連動し、それによって何がもたらされてい

るのか、それがいかにして三島文学を形づけているのかを検証した。とくに以下の四つのモチーフをとおして三島文学を読みなおしてみた。

## 1. 三島文学の「問題」とその構造的特徴

三島文学は「時代（＝昭和）との一体化」と「反時代的ポーズ」によって特徴づけられる。異常なまでに「時代性」に拘泥していた三島（文学）の有用性は、時代への絶え間ない問いかけがわれわれを取り巻く今日のさまざまな問題を先取りしていたことにあるのであり、そこに三島文学の現代的な意味を求めることができる。

とりわけ、三島のテキストにおける構造的な特徴は二項対立構造と反転の運動に求められるのだが、その特徴は三島文学のどのレベルでも確認することができる。三島にとって文学は「社会秩序の隠密な再編成」としてコンテキストを反社会的なしかたで解釈し、再構築＝テキスト化したものである。そうすると、書くことは社会的な諸現象を問いなおす作業と同義であり、三島はそれを可能にするためにさまざまな文学的装置を用意していた。そうした戦略的な物語装置が二項対立構造なのである。しかしその二項対立構造は、コンテキストを取り込み、構築しなおしたテキストがおりなす「表層」にすぎず、そこにはすでに概念のゆらぎ／反転の装置が用意され、あらゆる意味は攪乱／脱構築される。この問いなおしの例を「夢」と「海」のメタファーに求め、その象徴性と機能を検証した。それらはたんに境界を攪乱し、解体していく表象＝記号であるだけでなく、さらに「社会秩序の隠密な再編成」として「世界の解釈＝世界の裏返し」を可能にした装置でもある。

## 2. 三島文学におけるセクシュアリティの問題

ここでは、従来の三島研究の中でも多く取りあげられていたセクシュアリティの問題を近代のフェミニズム研究の観点から考察し、その戦略性を明らかにした。三島の性的言説はたんにホモセクシュアリティではなく、「(ホモ)セクシュアリティ」によって構築されている。それは「正常さ」を演じるジェンダー・パロディと過剰な「男らしさ」の演技によって特徴づけられるものである。それは三島の男色における特殊な論理の上に成り立っているものであり、それゆえ、三島の「正常さ」の演技はホモセクシュアルからの逃避ではなく、逆にホモセクシュアリティの究極な実現を意味するのである。(ホモ)を括弧付きであらわしていることからわかるように、三島文学の性的言説における戦略的独創性は、ホモセクシュアリティをたんにヘテロセクシュアルな言説に対峙させていたのではなく、その構造自体を攪乱し、解体していたことにある。そうしたことは三島文学のどのレベルにおいても同様だったのであり、そこでは性的なものがホモとヘテロとの両セクシュアリティの戯れによって構築され、終局にはそれ自体をも決定不可能なものとし、あらゆる性的言説の決定論から逃れていたのである。

かくして三島は（ホモ）セクシュアリティをホモソーシャルな男同士の特殊な関係に変容させ、そのプロセスを正確に、いやむしろ誇張的に演じながら、性差に基づく秩序を不安定なものにしていく。われわれはそこに三島文学の性的言説における戦略的有用性を求めることができる。

### 3. 性的なものとの政治的なものの結節点

三島文学における性的なものとの政治的なものの結節点は「戀闕（の情）」あるいは「戦士共同体」という男同士の特殊な関係に求められる。それらは三島文学における美学を完成させるものであり、かつそのテキストの政治性を露出するプロセスでもある。というのも、文学活動の時期を問わず三島文学はホモソーシャルな言説を的確に模写しながら、それを分析、また批判する形で統一されていたのであり、三島の「問題」のほとんどはホモソーシャルが生み出している暴力的な言説とその射程に収斂されていたからなのである。

とりわけ、戀闕のモチーフは後期の三島文学のなかでくり返し反復されていたのだが、それがどのような類のものなのかをはじめて提示したのは『憂國』である。それを簡単にまとめると、三島は物語の前提になっていたヘテロセクシュアルを巧妙にホモセクシュアルなものにすりかえることによって物語におけるすべての意味を攪乱し、反転させ、終局には「反逆の物語」として書き上げていたのである。結局のところ、三島は「戀闕」というモチーフをとおして自らの「美学」を再概念化し、そして最終的には近代的な戦士としての男性性と政治に帰依する態度を明らかにする。だが、その過程で抑圧されたホモセクシュアルの欲望を可視化すると同時に、今日の異性愛社会システムのもつジェンダーの無根拠性を暴露したのである。ここで象徴的ではあるが、三島文学の中心にその姿をあらわしはじめたのは天皇であり、そこで三島が「反逆」の物語を書いていたのは注目に値する。

### 4. 天皇批判をめぐる言説

周知のように三島は、おのれの精神のむなしい空転をとりおさえる絶対地点を、肉体そのもの、集団の大儀そして死に求めようとし、その絶対地点にあるもの、それを「絶対なるもの」としての天皇に見いだしていた。だが、三島においてはそうした絶対なるものや究極の同一性ですら、すでに反転可能性を内包していた。それは、君主への忠誠を具象化する戀闕の情を反逆の物語として書き上げていたことからわかる。そのため、日本文化の再生を文化概念としての天皇の招来に求めようとした三島の反時代的戦略さえも、たんに「神話」の回復という文字どおりの意味ではなく、むしろそうした「神話」への到達不可能性を露出させる逆説的な実践として理解すべきである。

とりわけ、注目されるのは、三島が天皇像が具体的な歴史上の出来事と結びつけられ、より辛辣に批判されていたことである。そこでは象徴天皇が批判されていただけでなく、さらには天皇の戦

争責任の問題にまで敷衍されていたのであり、それはひじょうに示唆的である。執拗なまでに繰り返される「などてすめろぎは人間になりたまひし」(『英霊の聲』)という一句にすべてが集約されている三島の天皇批判は、究極の権威の不在を浮き彫りにする言説として重要な意味をもつものといえる。

## 第二部 境界のポリティックス

### ・II-1: 三島由紀夫からジャン・ジュネへ

ここでは、三島とジュネを交差させながら、三島文学の限界をジュネのテキストに求めてみた。とりわけ、以下の三つの観点から両作家のテキストに光を当てて、とくに両作家の相異がどこから起因するのか、そして差別を生み出す暴力的な抑圧構造を反復せず、いかにして<他者>へと開かれてゆくことが可能なのかを考えてみた。

#### 1. 三島とジュネの言語論とテキストの戦略

まずここでは両作家のテキストを理解するために、ふたりの言語論を検討した。そこにはまったく同じであるとはいえないものの、重なる部分があった。言語の本質を三島は腐蝕作用に、ジュネはその増殖作用に求めていたのだが、どちらもことばにおける意味の攪乱作用に注目していたのである。しかし両者の相異が著しくなるのは、言語と文学者との関係においてであった。そこには、言語を巧みに操作し、テキストを完全に支配・制御する三島と、もっぱら言語の増殖を可能にする場としてテキストを提供しているジュネ、という異なる文学者の姿があった。

いずれにせよ、三島とジュネはともにそれぞれのしかたで境界を問題にした作家である。二人とも現存の社会関係や権力関係を転覆／攪乱する可能性を、誇張された男性性のパロディを実践することに見だし、ジェンダー化された社会的コードを意識的に篡奪すると同時に、そのコードが実は政治的・社会文化的また歴史的構築物にすぎないことを明らかにしてきた。このように性的な差異の横断をとおして政治的なものをつねに問うてきたことを否定することはできない。

しかし、にもかかわらず、両者のあいだに戦略的相違があることも認めざるをえない。その違いはもっぱら同一性の問題に由来していたのであり、両作家のホモセクシュアリティの戦略的特性と不可分なものであった。究極の同一性に駆りたてられていた三島と、つねに絶対的な孤独のなかに身を置き、いかなる共同体への参入をも拒否していたジュネの姿はきわめて対蹠的である。

#### 2. ジュネの「反社会的」セクシュアリティとその戦略的特殊性

ジュネのホモセクシュアリティは「女性的」なものの喚起によって特徴づけられており、それは彼のテキストの戦略と無関係ではない。それは、女性化を軸としたジュネのホモセクシュアリティ

が支配の欲望と直結している男性的権力に対峙する手段としてもっとも反社会的なものであり、彼の政治性を決定してゆく重要な要件だったからである。そうしたジュネの反社会的なホモセクシュアリティはつねに現下の支配体制から逸脱した社会的な「悪」として体现される。

それがひじょうに象徴的で戦略的に具現されていたのは肛門性愛の場面においてであった。ジュネは肛門という汚染された場所で言語システムをただちに変質し、茶化し、分解し、最後には権力をつくり出すシステムの墓場へと変容させていたのである。それが大きな意味をもつのは、差別を生み出す構造は「汚れた他者性のなかに放逐して価値転換をはかる行為によって、確立されるもの」だからである。それゆえ、もっとも汚い場所こそが差別構造を無力化するより戦略的な場となりうるのである。ジュネにとっては、敵の論理を逆手に取り、つまり「内」部を結果的に「外」部に変える肛門こそ、他者を生産し、差別を生み出す構造を混乱・攪乱させるラディカルで、強力なものだったのである。このように、ジュネは肛門を境界攪乱の場とし、現下の社会体制の墓場＝不毛の場にすることによって、体制の再生産のプロセスを食い止めていたのであり、そこにわれわれは彼のセクシュアリティにおける戦略的特殊性を見いだすことができる。

### 3. <他者>へ開かれてゆくまなざし

差別構造を無力化していたジュネはあらゆる<他者>へとコミットしてゆく。それがより目立っていたのは演劇の時期以降である。ジュネの演劇はもっぱら支配／被支配の力関係を問題にする政治的なものであり、権力の座についているあらゆる支配者たちの空虚な演劇性を批判する。こうしたジュネの姿勢は、パレスチナ人やブラック・パンサーへの全面的な支援や彼らとの連帯に代表される直接の政治的活動へと移る。

そうした一連の過程のなかでとくにわれわれの目を引いたのは、臭い＝匂いや不潔さをめぐるエクリチュールであった。そこには臭い＝不潔の政治学と呼びうるものが戦略的に書き込まれており、そこでジュネのテキストのもつ政治性が明確に形をみせていたからである。かくしてジュネは、現下のさまざまな（権）力関係をほぐす戦略として、あらゆるヒエラルキーを越えてすべての存在にその尊厳を与え返す言説を創造する。こうしたジュネの思想や抵抗の姿勢は、他なるものの尊重へと開かれてゆき、他者と政治的な連帯をつくりだす。そしてジュネは、「侮辱」の体系それ自体の解体を試みる。それこそ、あらゆる差別の温床だからである。結局のところ、ジュネの社会的反逆性は同一性の構築過程にある関係性の拒否にあったのであり、それは反逆を挑発する抑圧状態を反復せず、あらゆる<他者>へと開かれる唯一残された方法であった。こうしたジュネの抵抗のしかたこそ、彼のテキストがもっとも革命的といわれる所以である。

#### ・ II-2：差異の政治学：マイナー文学と近代文化批評 — 金鶴泳を例に

ここでは、アイデンティティ・ポリティックスを支えている同一性の幻想を解体する戦略として、その枠の境界におかれた存在がそれを乗り越えるために行った文学的「戦い」を分析した。これはマジョリティの言語によって「思考の秩序」そのものを変形させられた存在が、その同じ言語によって、その言語の支配する環境のなかに自己を位置づけ、表現するという意味を問いなおすためであった。とくに「吃り」という特異な言語行為と民族意識の問題に焦点を当ててテキストの戦略性を浮き彫りにした。

## 1. 在日朝鮮人文学の特殊性とその可能性

本論文では、在日朝鮮人文学を、とくに戦後に生まれた在日朝鮮人による日本語文学に限定した。それは在日朝鮮人文学を狭義に解釈することにより、その文学のもつ特徴や意義をより明確にするためであった。「在日性」と「民族性」という相矛盾する二つの概念のはざまに、自己をどのように位置づけ、捉えなおすか、ということが戦後の在日朝鮮人文学の最大のテーマである。そのため、在日朝鮮人文学には「在日－朝鮮人」であることから派生するさまざまな問題が凝縮されていた。だが、ここで注目すべきなのは、在日朝鮮人文学の新たな可能性が、まさしく「境界的な立場」という「在日」の存在様式の特异性のなかにあったということである。それは、その存在の特异性が文学そのものをも「境界的なテキスト＝＜中間＞で意味を生み出すテキスト」へと化すからである。

かくして自己回復術としての「文学」を、かつての抑圧者のことばである「日本語」を用いて表現しなければならない在日朝鮮人文学は、ドゥルーズが定義する「マイナー文学」と酷似する。それは言語における同一意味の伝達あるいは同一性の再現といった通念の虚構性を暴き、言語体系の閉じた単一的なアイデンティティの幻想を打ち砕いているからである。こうしたかれらの文学表現の有用性は、あらゆる対立図式に加担することなく、それを乗り越え、在日朝鮮人をめぐる暴力的関係項を脱構築してゆくことにあるといってよい。かれらの言語表現は、まさしくそのような境界線上で紡がれた言語として、ディアスポラの時代である近・現代を、特異な姿で照らし出しているのである。

## 2. 「吃り」の政治学

在日朝鮮人文学者の多くがそうであるように、金鶴泳も「引き裂かれた」自分を克服するために、文学上のひじょうな苦痛を負っていたのだが、彼の独創性は、「矛盾した存在」を矛盾のままに、つまり負性を負性のままプラスの方へ転じていこうとしたところにある。そのけっして容易でない「戦い」は、「自分を閉じ込めている何ごとかから自分を解き放つこと」、つまり「脱殻作業」である同時に「自己認識作業・自己定立作業」として「徹頭徹尾自己解放のための作業」「自分救済の営為」であるという金鶴泳の文学創造における意味と密接な関係のなかで構築されていた。

そうした文学的「戦い」を表象しているのがほかならぬ「吃り」であった。「吃り」という言語行為は沈黙表示のすきまを挿入することによってさまざまなニュアンスを生み出し、ことばの濃密な関係を解体し、その意味をもあいまいにしていた。このように、吃ることにより、ことば自体のつながりを解体し、そのあげく「口から出るそばから空無化していってしま」い、まったく不毛で交換価値をもたぬ言語行為へと化するのだが、逆にその不毛な言語行為から一種の「ディコンストラクティブな力」を見いだすことができるのである。そうすると「吃り」は、作家が戦略的に選択した自分の「自立的な言語」であるといえる。もっと断定的にいうなら、それは自分に与えられていた存在の歴史的条件と言語の問題とを脱構築するために用いられた作家固有の、異質的な「言語」なのである。その特異な言語行為のもつ重要性は、それが置きかえ不可能なものとして他のテーマと次元を異にする象徴的・戦略的記号であったというところにある。つまり、それは金鶴泳の文学を決定する記号として、彼の「戦術」であると同時に「自己再生術」でもあるのだ。

### 3. 「中間者」への意志

金鶴泳の民族意識をめぐる言説が問題にしていたのは、民族意識それ自体ではなく、もっぱらその転倒された論理であった。この問題は主に父と子の対立構図によって具現されているのだが、たとえば、北朝鮮を無条件にまつりあげている父の民族意識から日本帝国主義と同一の論理を見だし、そこで違和感を覚える挿話はその端的な例である。そこで明らかになったのは、他者を固定的なカテゴリーに押し込め、一貫した自己のアイデンティティを形成しようとするアイデンティティ・ポリティックスは、それがいかなるものであれ、その本質を問いなおさなければならないということである。なぜなら、その下に隠されているのは転倒された支配者の論理でしかないからである。結局、金鶴泳が批判しているのは民族意識やその必要性ではなく、あくまでも批判すべき論理を再生産してしまうそのメカニズムだったのである。

そこで金鶴泳は「日本（人）」と「朝鮮（人）」のあいだの「中間者」でありつづけようとする。それも「日本人でもあり朝鮮人でもあるような、積極的な正の中間者というよりは、むしろ日本人でもなく朝鮮人でもないというような、消極的な負」の中間者としてである。そのとき、在日朝鮮人のアイデンティティ・トラブルは逆に自分を救う手段となる。というのも、中間者であることによって差別の『まなざし』を受ける側の人間、と同時に、あの『まなざし』を差しむける側の人間、その両者」を、しかも批判的に「併せ持っている」がゆえに、その『まなざし』の正体を見きわめることができる」からである。

こうした金鶴泳の思想の重要性は、自分の生きる絶対的な場を求めないことにより、「民族的帰属感＝ナショナル・アイデンティティ」をかたくなに拒否しつづけ、そして「国家」「故郷」「歴史」「言語」「文化」といった近代人のセルフ・アイデンティティを支えている諸領域を越えて流浪し、

それらの概念に疑問符を付けることを可能にしていたことにあるのである。

#### [研究結果]

以上のように、本論文では三島由紀夫、ジャン・ジュネ、金鶴泳という異質な三人のテキストを分析対象とし、かれらがアイデンティティ・ポリティックスをどのように攪乱し、解体しているのかを明確にすると同時に、その戦略的起点を境界のポリティックスに見だし、かれらの文学的営みとその言語行為のもつ意義を考えてみた。とくに、異質な三人の文学者を取り扱ったのはアイデンティティ・ポリティックス批判を画一的なものせず、多様な角度・視点をもってその問題に接近していくためであった。

三人はそれぞれ同時代を異なる仕方で生き抜いてきた文学者である。かれらの存在条件や境遇はまったく違うものの、しかしにもかかわらず、つねに現下の社会システムに疑問を投げかけ、その暴力性を告発し、たえず人間の尊厳を問いなおしつづけた作家であったのはまちがいない。つまりかれらは、アイデンティティ・システムにおける不可能性や幻想性を可視化することを通じて、アイデンティティと呼ばれる保護装置の外に晒された人々のポジションを捉え直そうしていたのである。つねにシステムの中心に向かってるように見せることによって、その内部が抱えている問題を逆に露出しながら、あくまでも表層にとどまろうとしていた三島由紀夫、差別を生み出す政治体制を絶え間なくひっくり返すことによって境界を攪乱し、どこまでも<他者>へと開かれてゆきながら政治的な連帯をつくり出していたジャン・ジュネ、そしてディアスポラのなかで他者性に貫かれながら、新たな「時代」を切り開くため、けっして容易ではない「戦い」と「共生」を試みていた金鶴泳。いずれにせよ、かれらの文学の営みとその言語実践は、本質的な同一性や固定化された役割の二分法的な対立を通して階層秩序を維持しているアイデンティティ・ポリティックスに対抗するものとして実に大きな意味をもつ。そうすると、かれらの文学に限界があるかどうかということとはそれほど問題にならない。何より重要なのは、そうしたかれらの問いつめとその解釈のしかたにあるのであり、それをわれわれがどのように受けとめるのかということにあると思われる。

ところで、ここで何よりも注目に値するのはかれらの言語行為とその意義である。コンテキストを「翻訳する (traduire)」ことはつねにそれを「裏切る (trahir)」行為にほかならず、それゆえ、テキストの言語は必然的に反社会的なしかたで紡がれる。このとき、「翻訳」は脱構築的な営みである。翻訳が言語体系の抽象的・実体的・性の幻想を打ち砕き、存在の固有なる境界線を越えて言語を複数の他者へむけて押し開くかぎりにおいて、それは「脱構築」的な経験になるからである。そうした経験をより明確に構築していた文学者が本論文で取り扱った三人である。規範化された言説に内在する暴力性を告発し、それを生産するシステムを解体しようと試みていたかれらは、そのためにほかの「言語」システムをつくり出すのではなく、むしろその支配的言説を構築する言語と

同じ言語をもってその体系に対峙していたのである。すでにみたように、言語の腐蝕作用と異様な形での増殖、そして「吃り」の言語はすべて、現実の言語を浸蝕し、変形し、その濃密な関係を破壊するものである。かくしてコンテキストを「翻訳する」方法はそれぞれ異なるものの、かれらは言語の本質的特性にまで降り立ち、それを通常の言語と異なる形で紡ぎ出すことを通じて現下の規範生産のシステムに対抗していたのである。

## 論文審査結果の要旨

本研究は、文学テキストが規範を攪乱し、秩序に抵抗する側面を持つことを、現代作家の作品を題材にとりながら検証しようというものである。とりわけ、自他の区別を立てながら自己同一性を強化しようとするアイデンティティ・ポリティックスを批判的に取り上げ、それが前提とする対立を解体しようとする言語の作用を明らかにすることが目的である。そのために、本研究は自己と他者間に引かれた境界に着目し、この境界設定を攪乱し、ひいては無化してしまうような言語のあり方を、三島由紀夫、ジャン・ジュネ、金鶴泳のテキストに見いだしている。

とくに三島とジュネを論じるにあたっては、両者に共通するホモセクシュアリティの問題を取り上げ、性的差異の攪乱が言語によっていかに表現され、またそれがどのような政治的意味を持つかを詳細に論じた。三島は「正常な」男性性を誇張的に肯定したが、背後にあるホモセクシュアルな欲望も析出し、男女のジェンダー的対立の虚構性をあばいた。ジュネは、ホモとヘテロの対立を徹底的に解体し、「正常」と「異常」の関係の転倒を試みた。そうした言語実践をとおして、三島は同一性を内部から脆弱化し、ジュネはそれを外部の異質なものによって汚染されるがままにする。かくして、内部には同質性を要求し、外部には他者を排除しようとするアイデンティティ・ポリティックスの暴力に抵抗する言語のあり方が明らかになる。さらに金鶴泳は、吃音者である苦悩をとおして、日本語に同化することのできない在日朝鮮人という「境界」に立つ存在を生きる文学者である。そのテキストの分析は、発話の失敗という個人的な出来事が、ナショナルなアイデンティティへの同化圧力への抵抗という政治的意味を伴わずにいないことを示した。

本論文の独自性は、セクシュアリティや政治の問題を、あくまで言語実践の観点からとらえ、テキストの分析に徹して論じた点にある。その方法も斬新で、最新のフェミニズム理論や脱構築批評の操作を駆使して、性、政治、言語という分野を横断する形で論じるものとなっている。取り上げた作家も、互いに異質な三人の文学者であり、そこに共通の問題設定をみるには、広く深い視野と幅広い学識が必要とされるものである。このように、本学位論文審査対象者は、自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。